

政治家・田兄弟と丹波系人脈

1.はじめに

(1)本日の講座について

・地域から発見された書簡を読み解くことを通じて、柏原出身の政治家である田艇吉・田健治郎兄弟とその周辺の間人関係を検討し、近代丹波の政治社会の一端を明らかにする

(2)史料としての書簡の魅力

2.書簡と主要人物の紹介

(1)読み解く書簡について

【書簡①】 昭和2年(1927)9月6日付田艇吉宛松本剛吉書簡

【書簡②】 大正9年(1920)8月30日付田艇吉宛松本剛吉書簡

(2)主要人物について

◆田艇吉

生年月日：嘉永5年(1852)9月6日

略歴：1879年 兵庫県会議員

1891年 衆議院議員(以降当選4回、自由党)

1895年 住友総本店の支配人

1899年 阪鶴鉄道(現 JR 福知山線)の社長

その他：鐘ヶ坂トンネル開通への尽力、帝国電灯、柏原合同銀行の設立などの功績あり

昭和13年(1938)11月27日に87歳で死去

◆田健治郎

生年月日：安政2年(1855)2月8日

略歴：1874.7 熊谷県雇、1875.4 愛知県出仕、1876.6 司法省出仕、1882.2 高知県警部長

1883.2 神奈川県警部長、1888.11 埼玉県警部長、1890.4 逓信書記官、1893.2 郵務局長

1893.11 通信局長、1897.8 電務局長、1898.1 逓信次官兼鉄道局長、1898.7 依願免本官

1898.12 関西鉄道株式会社社長、1900.10~01.6 逓信総務長官、1901.8 衆議院議員(政友会)

1903.9 逓信総務長官、1903.12~06.1 逓信次官、1906.1 貴族院議員、1907.9 男爵

1907.11 九州炭鉱汽船株式会社社長、1916.10 寺内内閣逓信大臣、

1919.10 台湾総督、1923.9 第2次山本内閣農商務大臣、1926.5 枢密顧問官

その他：父は大庄屋田文平。大正8年(1919)に文官として初の台湾総督を務める。

昭和5年(1930)11月16日に死去

史料：和風漢文調の日記（『田健治郎日記』）が残る。

明治 39 年(1906)1 月から死去 1 ヶ月前まで書き続けられ、極めて記述が詳細。

◆松本剛吉

生年月日：文久 2 年（1862） 8 月 8 日

略歴：1874 年 柏原小学校卒業

1875 年 黒井の小国謙三の塾に入る

1876 年 黒井小学校助教

1877 年 兵庫県警察本署詰雇

1879 年 柏原に一度帰り、東京に向かう 9 月に千葉県巡査の試験に合格、千葉警察署内勤
これ以降、北条警察署、高知県監獄書記などを転々

1883 年 同郷の先輩である田健治郎（当時、神奈川県警部長）の誘いで同警察勤務になる

1898 年 逓信大臣秘書官

1900 年 農商務大臣秘書官

1904 年 衆議院議員（第 9～11,13 回総選挙当選）

1916 年 逓信大臣秘書官

1919 年 台湾総督秘書官

1927 年 貴族院議員

その他：柏原藩士今井源左衛門五男として生まれ、叔父松本十兵衛の養子となる。

東京方面での活動が中心だが、柏原出身で、田健治郎と関係が深く、田の側近として活動
昭和 4 年（1929） 3 月 5 日に死去

史料：大正元年から昭和三年にわたって書かれた『松本剛吉政治日誌』が残る。松本は元老山県有朋、西園寺公望の情報係として活躍した人物であり、元老の山県・西園をはじめ、寺内正毅・清浦奎吾など藩閥・官僚系政治家や、原敬・高橋是清などの立憲政友会最高幹部の元へ出入りして、彼らに政治情報をもたらすと同時に、彼らから情報を得ていた。しかも、その情報の精度が非常に高かったため、彼は「政界の通人」と呼ばれるようになった。「日誌」は政界の往来、政治の推移を克明に記しており、極めて貴重な史料とされる。

3. 書簡の解読と内容分析

・【書簡①】

・【書簡②】

おわりに一可能性と展望一

今回の二通の書簡がもつ二つの意義

①貴重な松本剛吉自筆書簡の新出であるということ

②松本剛吉と田艇吉の日常的な関係を確認できるということ

⇒今回わずかだが確認できた丹波人の結合も含めて、三者の関係は今後さらに検討される必要がある
その意味でも、今後さらなる地域史料の発掘が待たれる！

◆◇翻刻

()内は自信がない箇所 ■は翻刻者の力量では判読できなかった箇所。

*本文は追い込み式で処理したほか、読みやすさを考慮して適宜、読点や中黒を付した。

【書簡①】昭和二年九月六日付田艇吉宛松本剛吉書簡

[封筒表]

兵庫県氷上郡柏原町田艇吉様 小田原^八八^五 親展 書留

*「小田原 2・9・6」の消印あり

[封筒裏]

神奈川県小田原十字町三 謹 松本剛吉

[本文]

別帑^(朱書)ハ西園寺老公御親筆 田捨女の題字 森繁夫氏ニ送付

肅呈御(全治)ノ趣、御丁寧ニ御懇書頂戴■■入(候)、本日御殿場へ相伺候処、別封出来
罷申候間、直チニ差出申候、御落手被成下度候、一寸御礼状御差出置被下度候、宛ハ静岡県
御殿場御別邸ニテ宣布候、右取急ギ御送付旁申上置候 以上

九月六日 剛吉

田艇吉様

【書簡②】大正九年八月三十日付田艇吉宛松本剛吉書簡

[封筒表]

大阪市南区北桃谷町 田艇吉様 必親展

*「芝 9・2・23」

[封筒裏]

東京市芝区宇田川町十一番地 松本剛吉

[本文]

謹啓仕候、酷暑ノ候益御健康奉賀上候、閣下⁽¹⁾ハ頗ル御元気ニテ毎日事務ヲ見ラレ罷候間、御安神奉願上候、⁽²⁾老生九月二日出発急行入東京仕候間、(御承了)被下度候、一寸大阪ニ立寄可申筈ノ処急ニ参り候次第ニ付御伺不申上■■■申上候、⁽³⁾閣下ヨリ日下(部)様・山本代議士関係ノ件御話有之、承了仕候、幸ニ長田桃蔵君、小山健三(成)者ハ折悪ク候間、⁽⁴⁾老生ガ口ヲ出シ、可然トキ出来候得者、東京へ御申越被下度、左候得者老生直チニ大阪へ参り活動可仕候、(尊)臺様ヨリ御指図有之候迄ハ老生ハ口ヲ出ス事差控へ候様閣下ノ御下命ニ御座候、右御含ミ置被下何卒東京へ御申越被下度候、⁽⁵⁾老生ハ九月二日出発直行(ヲナシ)九月六日夜小田原著、一兩日間小田原滞在、直チニ東京へ参り可申候、先ハ右申上度如斯ニ御座候、艸々

以上

八月三十一日 認ム

剛吉

田艇吉様

■■■

尚々小田原ハ山公閣下ニ拝謁、林謙吉郎君死去ニ付其用件ナレドモ、或ハ半日一日滞在ニテ直チニ東京へ参り候哉モ難斗候、兎ニ角東京小田原間ニ滞在罷在申候